

---

# 明日の空の色

きよこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明日の空の色

### 【Nコード】

N1727C

### 【作者名】

きよこ

### 【あらすじ】

六月はなぜ祝日が無いのだろう。灰色の世界はいつまで続くのだろう。休みが遠い水曜日。そんな日の物思い。

水曜日。一週間で一番憂鬱な日。土曜の休みが遠い。

寝起きの気だるい体を持ち上げると、ざあざあと雨のざわめきが聞こえた。そうか、梅雨入りしたんだ。カーテンを人差し指だけでどかす。窓に叩きつける雨が、窓に斜線の模様を描いていた。

今日も雨。

小さいころは雨が大好きだった。

「しとしとぴっちゃん」なんて言いながら、運動靴のまま水溜りに入り込んで遊んでいた。雨音が好きだった。水溜りに丸い模様がいつまでもいつまでも重なっていくのを、じっと見ているのが好きだった。

いつから雨が嫌いになったんだろう。

体がいつにも増して重い。会社に行きたくない。私がいなくても、会社なんて成り立つんだ。誰かが私のやるはずだった仕事を背負って、少し苦勞するだけ。『私』が必要なんじゃない。『仕事をやる人』が必要なだけ。代わりなんて、いつだって存在する。

コーヒーをしこたま飲んで、ちっとも効きやしない。雨のせいか、頭痛がする。眠気が消えない。

会社に向かう途中の、外の世界は灰色。駅から出て行く人々はみんな、それぞれ背中何か重いものを背負い込んだように背を丸くして傘をさす。

黒、灰色、茶色。ダークな色合いの傘が、この世界をよりいっそう暗いものにする。時折見える、赤い傘や水色の傘が、そこだけ白

黒映画の中でひっそりと色付けられているみたいだった。

どんなに雨が降り続けても、嵐みたいになっただって、社会は止まることなんてない。永遠に止まることのない歯車をひたすら動かし続ける私たちは、まるで疲れを知らないハムスターだ。回し車を必死に回す、ハムスターだ。

外の世界なんて一切関係ない、無機質な会社の室内。

いつの間にか雨は弱くなり、窓の外を覗いたってどんよりとした雲が見えるだけになっていた。そぼふる雨音に聞き耳を立てる者なんていない。パソコンを睨みつけ、伝票をめくり、うるさい電話音にイライラする。

頭痛が増してゆく。

水曜日。休みが遠い。六月はなぜ祝日がないのだろう。『梅雨の日』を作ってくればいいのに。

六月はだるい季節。一番嫌いな季節。

残業なんてしたくない。今日はさっさと帰るんだ。本当は今日中に片付けたい仕事を明日に残して、私はとつとと会社を出る。

上司がまだ仕事をしていただけ、待つ理由なんてない。

「熱っばいんで、お先に失礼します」と会釈して、「帰るのかよ」と不満げな上司の視線に気付かないふり。私は傘とバッグを抱えて、会社という檻から抜け出す。

しとしとと降り続く雨。

ビルの中、壁に囲まれ、息づく世界を見つめられない。無機質で閉鎖的な空間は季節なんて関係なく、一定に保たれた温度の中、私は会社という籠の中で飼いやられる。

外で小さな花が咲いても気付くことなく、葉が青々と繁っても気付かない。ふと見ると枯れ葉が落ちて、冷たい空気があたりを包んでいても、季節の移り変わりは知らない間に過ぎ去ってゆく。

春も夏も秋も冬も、気付かぬうちに去ってゆく。

小さいころは、足元を見ても、空の彼方を見ても、発見に溢れていた。きらきらと輝く結晶がいたところに潜んでいて、発見を待たせてくれる。

大人になり、私の目にはフィルターが取り付けられて、私に關係ないものなんて何も見えなくなっていた。

大人になるということは、なんて切ないことなのだろう。  
輝きに満ちた世界を輝いた目で見ることは、もう出来ない。

ふと、気付く。傘をさしているのは、私だけ。

雨が止んでいた。

傘の向こうに、かすかに見えた空。

空は、雲の裏側でだんだんと赤く染まる。雲の隙間から、カーテ

んのように降り落ちる光。黄金の光が、ビルの影を伸ばしてゆく。傘を畳む人々が、まぶしそうに太陽を仰ぐ。赤く揺らぐ、光。

世界は灰色のはずだった。

金色の光の世界は、やがて赤く赤く。

ああ、そうか。

私は見ようとしていなかった。邪魔となるものを、ただ邪魔だと片付けて、それを楽しむことさえ出来なくなっていた。

幼い頃は、世界の全てが色を持ち、輝きを放っていた。

色は失われたわけじゃない。私の目が、世界を灰色にしていた。

世界はたくさんの色を放ってる。

くもった私の目にさえも、それは突き刺さるように主張する。

傘の向こう側は、鮮やかな光。

灰色の傘を畳んで、私は久しぶりに太陽を見る。何千回と見た太陽だって、同じ色で輝いた日はきつと無い。

毎日違う色で、世界を照らしてる。

明日はどんな色に見えるのだろう。オレンジ色か。真っ白か。

空は青く見えるのだろうか。今日のように灰色なのだろうか。

ちっぽけなことだけ。

意識するだけで、世界は違う色を放つんだ。

気まぐれな六月の空模様を思う。

明日の空の色は、何色だろう。

少しだけ。

だけど、小さな楽しみが出来た、六月の水曜日。

(後書き)

仕事に追われた日々の中にと、太陽を見たくありません。屋内での仕事は、帰りが遅いと外は真っ暗で、朝しか太陽が見れません( ;  
- ; )

作者は仕事がハードになるばなるほど、何か書きたくなります。ふと思い立って書いてしまいました、いかがでしたでしょうか。疲れているときでも、何か小さな楽しみを見つけ、毎日楽しくやっていますと、日々思います。

ご意見ご感想、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1727c/>

---

明日の空の色

2010年10月11日15時41分発行